



春華と香奈子のパジャマパーティー

私こと新浜香奈子は、就寝前の自室に春華ちゃんという兄貴がご執心の美少女と談笑していた。彼女は大雨によって突発的に我が家に泊まる事になったのだけど——こんな美味しい機会を私が見逃すはずもなく、こうしてパジャマパーティーを開催した次第である。

「ふふ、こういうお布団を並べてのお喋りつてとてもいいですね」

「でしょ？　これがお泊まり会の魅力つて奴だよ！」

一緒の部屋で寝る事になった春華ちゃんに、私は気分良く笑いかける。

今日一日の事で私はすっかり春華ちゃんが大好きになっていた。超絶的な美人なのに心まで清らかな天使であり、兄貴の惚れっぷりも理解できる。

「しかし春華ちゃんってえらく謙虚だよー。そこまで可愛くてお父さんが大っきい会社の社長さんとか、多少はブイブイ言わせちゃいそうなんだけど」

私は春華ちゃんに対する感想を素直に述べた。正直、春華ちゃんは奇跡のような存在だと思う。ここまで可愛い上にお家は大金持ちで、生まれ持ったモノがチートすぎる。それなのに、彼女の心はどこまでも謙虚かつ清廉なのだ。

「ええと、実はそう言われる事も多いんですけど……私は自分の事を何か特別だとは思えないんです。確かに私の家はかなり裕福だと思いますけど、そんな事は私自身の価値には関係ないじゃないですか」

（す、凄い……本気でそう思ってるんだ）

容姿の美しさも家が大金持ちである事も、『自分』の価値ではないと心の底から思っているように、私は少なからず驚いた。

これは兄貴や彼女のパパが『護らねば』となるのも頷ける。私自身、この春華ちゃんの綺麗な心を損なつて欲しくないと強く思う。

「なるほど……大体わかったよ。でも、春華ちゃんは世間一般では十分に特別な人だから嫉妬には凄く気を付けてよね！　小さい頃からよく女子に絡まれたって言ってたけど、そういう奴らつてモテる女の子にはヤバいくらいに怨念燃やすから！」

「は、はい……新浜君にも殆ど同じ事を言われましたけど……その、やっぱり一般的な話として、女の子は男の子から人気があるかどうかを凄く気にするものなんですか？」

「そりやそうだって！　誰だってモテたくたまんなくて、男子も女子も殆どその事で頭がいっぱいだよ！」

「や、やつぱりそうなんですか……！」

ごく当たり前の事を熱弁すると、春華ちゃんは衝撃の事実を知ったかのように驚いていた。私からすれば、その反応の方が驚きでしかない。

「うーん、春華ちゃんって恋愛に興味ないの？」

「それは……わからないというのが正直なところですね。恋愛がこういうものか、知識上はもちろん知っていますけど……」

布団の上に座る春華ちゃんは、自分の中を探るように言葉を続ける。

「恋愛の物語を楽しんだりもしますが、それはあくまでお話の中の事で、遠い場所の知らない出来事のように実感がないんです。だからクラスでの恋愛の話なんかも入っていきなくて……」

なるほど……本当にそういう観念が薄い訳なんだね。

「じゃあちよつと角度を変えてさ！ 恋愛とかそういうの抜きでいいから、どういう男子だったらいい人だなんて思う？ 男子で友達を作るならどういうタイプがいい？」

その話題は、兄貴のための情報収集だった。さりげなく春華ちゃんの好みをリサーチすべく、このモテ中学生である香奈子ちゃんの目が光る。

「そうですね……あんまり考えた事が無いですけど、まず優しい人ですね。いつも他人を思いやれる人です」

ふんふん、まあ男女問わずそこは基本だよな。

「それから、頑張り屋な人は見ていて気持ちがいいですね。勉強にせよスポーツにせよ精一杯努力する人は、見ているこっちまで元気になります」

（うん……？）

予想外な事に、春華ちゃんは饒舌に『友達にしたい男子のポイント』を挙げていく。

『時には友達を強く論してくれる』『実家の家柄に気後れしないで遊びに来てくれる』『とてもしつかりしていて心から頼りになる』等々――

（つて、どれもこれも兄貴の事そのまんまじゃんっ！）

これが無意識なのだとしたら、本当に天然なんだと私は感嘆の念すら抱く。

だけど……これは本当に喜ばしい事だった。

春華ちゃんは確実に兄貴に影響されている。兄貴が行ってきた恋愛的活動の全てが、春華ちゃんの中に息づいているのだ。

「春華ちゃんっ！」

「は、はい」

「そのさ、これから兄貴の事よろしくね！ 本当にめっちゃ春華ちゃんの事を大事に思っているからさ！」

「え、ええ、それはもちろんです！ こうやって妹の香奈子ちゃんとも仲良くなれましたし、新浜君とももつと仲良くなれたらいいと思っています！」

眩しいばかりの笑顔を見せる春華ちゃんを見て、私は改めて兄貴の恋愛成就を祈る。

きつと、この天使すぎる人を幸せにできる男はスーパ―な男に生まれ変わった兄貴しかいない。身内への応援だけでなく、今日できたばかりの友達の未来のためにも――この二人には結ばれてほしいと、私は強く願った。